
真夏の夜の雪

新辺カコ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真夏の夜の雪

【Nコード】

N7147T

【作者名】

新辺力コ

【あらすじ】

僕は、山で不思議な女の子に出会う。その子の正体は、ある悩みを抱えた雪女だった…。

夏休み、僕は一人で田舎のおじいちゃんの所へ行った。

田舎へ行くのは毎年恒例になっている行事のようなものだけど、小さな頃からアパート暮らしの僕には、そこにある何もかもが珍しくて、面白い。

もちろん行く前に母さんから、

「遊んでばかりじゃなくて、ちゃんとお勉強もしなきゃダメよ」
って、釘をさされたけど。

でも、今日はとってもいい天気だ。とても勉強なんて手に着かない。

僕は、書き取りをそこそこに切り上げると外に飛び出した。

へへ、探検、探検。今日は山に登ってみようっと。

「山の天気は変わりやすいから気をつけろ。今日は、雨が降るかもしれない」って、おじいちゃんの声が後ろから聞こえる。僕は、空を見上げた。お日様が眩しくてクラクラする。こんなにいるいい天気だけど……。でも、おじいちゃんの天気予報はテレビより正確。いつも当たるから、一応、雨具は持っておこうかな。

外歩きが好きな僕にとっては、こんな山道はお散歩コースみたいなものだ。鼻歌を歌いながらずんずん歩いた。

もう少し行けば、沢があるはずだ。その水はとっても綺麗で冷たくって。座って一休みするにはもってこいの場所。さあ、急ごう。

そう思った矢先、

ポツ、ポツ……

「雨だ」

やっぱり、おじいちゃんの天気予報は当たった。けど、この雨何だか変だ。

空は雲一つ無いし、風だつて吹いてこない。空気も湿った感じがしないし、第一、冷たいんだ。この雨……。生半可な冷たさじゃなくて、水が氷になる寸前の冷たさ。僕はぶるつと震えて先を急いだ。

沢には、先客がいた。

多分、僕と同じ年か、もしかしたら少し上かもしれない女の子だ。しゃがみこんで泣いている。足でも挫いたんだろうか。気になって声をかける。

「どうしたの？ 道に迷ったか、それともどこか痛む？」

女の子は顔をあげて、首をふるふると振った。

人形みたいに綺麗な子だ。僕はしばらく見とれた。

（かわいいなあ……。こんな子、この辺にいたっけ？）

「ひとりじゃ怖いんなら、一緒におりよう」

女の子はまた、首を振った。

「違うの。わたしは、ここに住んでいるの」

女の子は、ヒナと名乗った。

「わたし、雪女なの。最近この山の担当になったのよ」

「嘘だい」

雪女なんて、いる訳ないや。僕は笑った。

ヒナは、そんな僕をちよつと睨むと手を伸ばし、羊歯の葉を取る

と、

「じゃ、これなら信じてくれる？」

ふうつと息を吹きかけた。と、見る間に葉は凍ってしまふ。

「わたしが本気になれば、あなたなんか凍らせちゃうから」

ぶん、と横を向き、むくれるヒナに僕は謝る。怒らせちゃったかなあ。

「ごめん。本当に雪女がいるなんて思わなかったから。それに……この辺は最近、雪が降らないって、おじいちゃんが言ってたから」
その言葉に、ヒナはしゅんとなる。やばい。また悪いこと言っちゃったかな。

「……雪が降らないの……きつと、わたしのせいよ」

「どういうこと？」

「お山には、それぞれ天気を操るものがいるの。わたしはこの山の雪女だから雪を降らせなきゃいけないんだけど……わたしは半人前みたい。頑張っても、雪にならないの。冷たい雨になるだけ……」
今にも、泣き出しそうだ。

「き……きつと、この山にまだ慣れてないんだよ。慣れれば、そのうちきつと、上手いくよ」

「ありがとう……。でも、何度やっても駄目だったの。だんだん、自信がなくなってきた……。雪を降らせることが出来ない雪女は、存在している意味がないんだもの」

「そんなことない！ そんなこと、ないよ」僕は叫ぶように言った。

「僕のおじいちゃんが言ってた。どんなものにも意味があるって。意味のないものなんか、この世にはないって」

ヒナは、潤んだ目で僕を見つめた。

「優しいね。あなたは。……山道はすぐ暗くなるわ。早く帰りなよ」
ふい、と横を向いたまま促す。泣き顔を見られたくないのかもしれないのかもしれない。

「凍らせちゃうなんて……嘘よ。あなたみたいに優しい子、凍らせなんてことしない」

背に聞こえる声が、どこか淋しそうだったのが心に残った。

「冷たい雨が降ったじゃろう？ 女の子がいなかったか？」

帰り着くなり、おじいちゃんが僕に聞いた。なんでわかるんだらう。

「ヒナのこと、知ってるの？」

おじいちゃんは、ゆっくりうなずいた。

「山と長く付き合っていると、人外のものを良く見るようになる。
あの子が人間でないことは一目でわかった。ヒナという名前なのか
あの子は、雪を降らせることが出来ないと悩んでいたじゃろう？」

僕は無我夢中でうなずく。

「大丈夫。今年はきつと、雪が降る。お前が、あの子に教えてやればな」

おしえる？ 僕が？

いきなりの言葉に、僕は戸惑った。

「おじいちゃん、僕、雪の降らせ方なんて知らないよ。ヒナに教えるなんて、できないよ」 おじいちゃんは笑って、日に焼けた手を僕の頭に置いた。

「あの子の遊び相手になってあげればいい。悩むばかりでは、道も見つけられん」

まるで、なぞなぞだ。僕は首をかしげた。

わかるのは、僕とヒナが友達になればいいってこと。

次の日、僕はヒナに会うために山に行った。彼女はやっぱり、昨日と同じ場所に座り込んでいた。

「ヒナ、遊ば」

声をかけてみるけど、返ってくるのは気のない返事。

「……そんな気分じゃない。あれからまた頑張ったけど、やっぱり雪は降らなかったの」「じゃ、ますます気分転換しなきゃ。ずっと山の中にいないで、降りてみたら？ 今日、おじいちゃん家で花火やるんだ。友達誘っていいって言われたから」

『友達』という言葉に、ヒナは振り向く。

「ともだち……」

そう言うのと立ち上がって、まっすぐ僕を見つめた。

「きれい……！」

ヒナは、花火を手にしてはしゃいでいる。雪女だから、花火なんかしたら溶けちゃうんじゃないかって心配だったけど、それは僕の取り越し苦労みたいで。

「ちゃんと、笑えるんだね。ヒナが笑うの、はじめて見た」

「そういえば、こんなに楽しいって思ったの、久しぶり。……あ！

あーあ……落ちちゃったあ」

燃え尽きた線香花火を名残惜しそうに見つめ、ヒナはつぶやいた。
「もう一本、やる？ どっちが長く点してるか勝負しよう」

二本の線香花火が、パチパチと音を立てる。

「きれいだね。わたし、花火をするのははじめてなの」

「雪女だから？」

「お話みたいに、簡単に溶けたりなんかしないわ。ずっと山の中でどうすれば雪が降るのか考えてばっかりで……こんな風に遊ぶなんて、なかったから」

線香花火はまだ、パチパチと燃えている。

「今日は、ありがとう。楽しかった。ねえ……また、遊びに来てもいい？」

「ああ、またいつでもおいで。たまには息抜きしなさい。悩んではかりでは、もともと出来ていたことも出来なくなるから」

そう言って、おじいちゃんはわらった。

「息抜きかあ……」

「お前は息抜きし過ぎ！ 母さんから電話があつたぞ。『あの子、勉強してますか』って」

「いってえ……！」

ゴツン、と拳骨をくらって顔をしかめる。ヒナがくすくす笑った。途端に、ちらちらと雪が舞う。

「あ！ 雪だ。ヒナ、やったじゃん！」

雨混じりの、頼りなく水っぽい雪。手のひらに乗せる間もなく消えてしまうけど、でもそれは間違いなく雪で……。

「はじめて、雪になった……」 おじいちゃんがヒナの頭を撫でて言った。

「天気を操るものは皆、子供の心を持っているんじゃ。無邪気な心を。時には、山からおりて遊びにおいで」

その言葉に、ヒナは大きくうなずいた。

今度、冬休みに遊びに来たときは、きっと雪景色だろう。だって、おじいちゃん是这样言ったもの。

『今年はきっと、雪が降る』
って。

おじいちゃんの天気予報は、テレビより正確だから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7147t/>

真夏の夜の雪

2011年5月31日22時26分発行